

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

3月上旬、諏訪市内で2日間の日程で開催された長野県ソフトボール協会の審判員伝達講習会に参加するため、早朝、自家用車で向かうが、高速道路は

路面凍結による事故が相次ぎ中央道の諏訪IC・伊那北ICの間、長野道の岡谷JCT・塩尻ICの間が上下線とも通行止めで一般道が大渋滞。大北地域へのスキー観光客の動向が気になってしまふ。

2月中旬に伊那市で開催された北信越伝達講習会に引き続きこの講習会は、新しく着任した役員の「やる気」みなぎる講習会となった。本年度は、久しぶりに大きなルールの改正だった。ソフトボール競技をより世界に普及させ、ソフトボールを愛し、楽しむ「仲間」を増やしていきたいとの趣旨が随所から伝

わっている。

「ストライクゾーン」の解釈の改正では、打者が自然に構えた時の「みぞおち」を上限とし、下限は「膝の皿の底部」、これまでホームプレート上に球が

置けようが出来るようになった。これに伴い球審の基本動作も大きな変更になった。ソフトボールに興味のない方には、内容は難しいのだが、これまでより多くの選

題に。北信越地域で開催される各種大会への審判員の派遣研修の充実や、資格取得しても審判員経験が少ない第3種の資格認定者には、1年間の間に一度は審判参加を義務付け

地域の絆を強めるために スポーツ・文化の振興が大切だ

「かかる」定義が、接していれば良くなったこと。ホームプレート上に想定される五角柱の上方空間のどこかを通過すれば「ストライク」と変更されたこと。また投手の投手板の踏み方も自由足を後方に

手が投手として取り組みやすくなったことだ。ストライクゾーンが厳しくて、四球ばかりと嘆く試合とは異なる試合展開が今年から期待できそうだ。平成39年の第82回国民体育大会への取り組みも話

たこと。新たな審判員確保に積極的に取り組み、などの方針が示された。そして、ソフトボールを未来の子供たちに「つなげよう」とのスローガンで相手を尊重したフェアプレー精神

の大切さを徹底することが再確認された。本年度は、福井県で国体が開催され、北信越地区枠での出場が期待できるので、新潟県で開催される大会には、審判員で応援団を募ろうとの提案に、研修会場

が大いに盛り上がる。国体開催の目標が長野県全体を活気づかせているのだと知った講習会でもあった。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



県内各地の講習会講師となるメンバー、納得するまで講習会が緊張に包まれる